

東日本大震災： 歯科衛生士として携わった歯科医療支援活動報告

著者	鉛山 光世
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	32
ページ	55-61
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/10232/17053

東日本大震災歯科医療支援活動報告

東日本大震災－歯科衛生士として携わった
歯科医療支援活動報告

鉛山 光世

鹿児島大学医学部・歯学部附属病院
臨床技術部歯科衛生部門
歯科衛生士

平成23年7月17日(日)から7月23日(土)の1週間、宮城県の南三陸町で被災者の肺炎予防、お口の健康を支援する目的で東日本大震災歯科医療支援活動をしてまいりました。今回の報告は、歯科医療支援の概要、歯科衛生士の目から見た被災地支援、課題、対策について述べたいと思います。

被災地での歯科医療支援の目的の一つに誤嚥性肺炎予防が言われています。平成7年1月17日に発生した阪神淡路大震災での関連死に誤嚥性肺炎が挙げられました。口腔衛生状態が悪く、抵抗力が落ちた高齢者の方々が肺炎にかかり命を落としました。その教訓から今回は歯科界も震災直後から被災地に入り、支援物資の配布や誤嚥性肺炎予防のための口腔ケアを行いました。

1. 歯科医療支援の概要

鹿児島大学病院は宮城県における医療救護班グループ15として派遣依頼を受けました。震災直後から他大学や他県の歯科医師会による14グループが活動しており、鹿児島大学は医療救護班の最終グループとして歯科医療支援を行うことになりました。支援内容は被災地での歯科治療、専門的口腔ケア、口腔衛生用品の配布、被災者の口腔衛生に関する意識の向上、地域歯科診療への誘導でした。

鹿児島大学チームの構成は歯科医師1名、歯科衛生士1名、その他に鹿児島県歯科衛生士会から歯科衛生士2名、計4名の混合チームで全員女性という構成でした。

以下、出発当日から時系列で歯科医療支援の活動報告をさせていただきます。

・7月17日(日) 出発当日

鹿児島空港に副病院長の田中教授をはじめ、鳥居教授、中村教授、下田平歯科衛生士長が休日にもかかわらず、見送りにきてくださいました(写真1)。大阪

写真1 : 17日鹿児島空港にて
出発前の見送り
下田平衛生士長と一緒に

写真2 : 仙台空港 横断幕



写真3：仙台空港の壁にはたくさんのメッセージ

経由で仙台空港に向かいました。仙台空港に着くと「がんばろう東北！」の横断幕や壁にはたくさんのメッセージが書かれたメッセージボードが貼られていました(写真2, 3)。仙台市に着くと所々、ビルの壁が壊れており工事のところがありました。人々の生活は普段通りに戻っている様子でした。仙台のホテルに着くと歯科衛生士会の2名と合流しました。私は歯科衛生士会に所属しているので2名とは面識があり、出発前にはお互いに情報交換をしていました。お互いに自己紹介をしあい、4人も歳も近いこともあり、すぐに意気投合しこのチームはうまくいくと実感しました。1週間をともに行動するためチームワークは必要と考えていたのでその不安はすぐに解消されました。

初日は宮城県歯科医師会館にて歯科医療支援活動についての歯科医師会からの伝達や注意事項の申し送りがありました。歯科医師会からの伝達は一般的な歯科治療ではなく、口腔ケアや義歯の調整などが求められること、それとともに被災地の現状を把握し、

地元の診療所に患者を送ることも目的の一つであるとされました。先班の九州大学チームも残ってください引き継ぎを行いました(写真4)。

・18日(月) 支援活動開始

南三陸町の被災状況確認と避難所を巡り口腔衛生用品が行きとどいているか、困っていることはないかなどの情報収集を行いました。

仙台から活動拠点の石巻に向けて歯科医師会が用意したプリウスで移動しました。プリウスには前後左右に鹿児島大学病院医療支援チームのステッカーを貼りました(写真5, 6)。このステッカーがあることで道路の誘導をしていただき大変役に立ちました。1時間半ほどで石巻に到着し、石巻のホテルに送ってあった歯科材料、器具器材を車に積み込み、支援地の南三陸町に向かいました。それから1時間程で南三陸町に到着しましたが、ずっと山道だったのが海の近くなるとテレビでみた津波被害の悲惨な状況が目に見え



写真5：宮歯から提供されたプリウスステッカーを貼ってます



写真4：写真九州大学チームと引き継ぎ



写真6：鹿児島大学チーム



写真7：震災前の南三陸町



写真8：震災直後の南三陸町



写真9：派遣時の南三陸町



写真10：震災後の小野寺歯科医院



写真11：6月に別の場所で開院（仮設）



写真12：小野寺先生を囲んで

んできました。言葉になりませんでした。

南三陸町のコーディネーターの歯科衛生士の三浦さんと待ち合わせの志津川中学校に向かいました。三浦さんに南三陸町の被害状況を高台から説明していただきましたが、建物は津波に流され町が消えていました(写真7, 8, 9)。初日は三浦さんと避難所を巡り、物資が行きわたっているか確認をしました。また、地元の歯科医師の小野寺先生とお会いし、震災後からの歯科医療支援の流れや今後どのように歯科医療を再建していくかの話を伺いました(写真10, 11, 12)。

・19日(火) 支援活動2日目

豊里多目的センターを訪れました。避難所になっており20名程が避難生活を送っていました。訪れた時は皆さん休んでいたりしていましたが1人の方に言葉かけをし、話を聞いていくうちに打ち解けていきました。その流れで口の中の状態を診させていただき口腔ケア、義歯清掃、唾液腺マッサージ等の指導を行いました(写真13, 14, 15)。午後は南三陸町平成の森の仮設住宅を訪問しました。1軒1軒仮設を周り、独居の把握、歯科治療が必要な被災者の把握、口腔ケア、支援物資の配布等を行いました。



写真13・14・15：避難所での口腔ケア

写真16・17・18：「いこいの海あらと」での活動状況

・20日（水）支援活動3日目

特別養護老人ホーム「いこいの海あらと」を訪問しました。4月に入所が始まった新しいホームでした。80名の入所に対して20名弱の入所でした。まず、五月女先生が全員の口腔内審査を行い、歯科処置が必要な場合は義歯調整等の処置を行い、処置が必要のない方には歯科衛生士による専門的口腔ケアを行いました。口腔ケア中は職員に付き添ってもらいケアの方法等を見てもらいながら指導も行いました。こちらのホームはまだ口腔ケア用品が不足しているとのことで保湿剤、スポンジブラシ等の配布を行いました（写真16, 17, 18）。



写真19：警察本部（身元不明者の情報提示・検死が行われている場所）



写真20：イスラエルの医師団が造った仮設の病院をそのまま使用（公立志津川病院）



写真23：狭い場所にユニット2台



写真21：公立志津川病院の歯科口腔外科



写真24：水がでないのでタンクに水を溜めて使用



写真22：公立志津川病院の歯科医師齋藤先生と一緒に

午後は南三陸町の災害対策の拠点になっているベイサイドアリーナに行きました。ここでは身元不明者の情報提示・検死が行われており警察本部がおかれていました（写真19）。敷地内にはイスラエルの医師団が造った仮設の病院をそのまま使用し公立志津川病院がありました。公立志津川病院には歯科口腔外科があり、

狭い仮設にユニットが2台設置してあり歯科診療が再開されていました（写真20, 21, 22, 23, 24）。

・21日（木）支援活動4日目

老健施設「つつじ苑」を訪問しました。ここには経管栄養の入所者の方々がおり、口腔衛生状態はあまり良い状態とは言えませんでした。午前中は認知のある方や比較的元気な方の口腔ケアを行いました。午後は経管栄養の方々の口腔ケアを重点的に行いました。ここでも職員の方に付いていただき、一緒にケアを見ていただいて注意することや口が開かない方の口を開ける方法、口腔ケア方法を指導しました。口腔ケア中、職員の方からは震災があったことでいろんな支援を受け、口腔ケアに興味を持つことができましたという意見が聞かれました。震災前は歯科が介入することもなく職員の方も入所者の口腔ケアにまで手が回らなかったそうです。歯科の介入が始まり、入所者の口の中まで気にかけるようになり口腔ケアを行うようになったとのことでした。この話を聞いて今までの歯科医療支



写真25：避難所の一角に歯科診療所を設置



写真26：佐藤先生とボランティアのDHの皆さんと一緒に



写真27：南三陸のコーディネーターDH三浦さんと最後に記念撮影

援活動の賜物だと思いました。

・22日（金）支援活動5日目（最終日）

最後に訪れた青年の家の避難所では地元の歯科医師が避難所の一角にユニット1台を設置し、歯科診療を行っていました（写真25）。この簡易歯科医院には実

家が南三陸町で現在は神奈川で歯科衛生士をしている方が職場から1週間の有休をとりボランティアに来ていました（写真26）。

支援活動中、4名の地元の歯科医師にお会いし、話をする機会がありましたが、先生方の地元を思う気持ち、歯科医療に対する思いが感じ取れました。皆さん限りある支援の中で一生懸命、被災者の口の健康を守るために働いていらっしゃいました。

避難所巡りをし、情報収集、口腔衛生用品の配布を行いました。どこの避難所の方も鹿児島から来たことを伝えると温かく迎えてくださり、話をして下さいました。避難所、仮設住宅では被災者の方々に色々なお話を伺いながら口腔ケアを行いましたが、大変な思いをしながらも皆さん前向きに力強く生活されていました。

5日間の歯科医療支援活動も終了し、南三陸町から仙台へ向かいました。宮城県歯科医師会への活動報告が最後の任務でした。5日間の活動内容、被災者の状況等、鹿児島大学チームが支援してきたこと、被災地では何が足りていて何が足りないか、被災者が何を欲しているか等々、歯科医師会に報告しました。被災地の状況を県の歯科医師会に伝えることも重要な任務だと考えました。南三陸町と仙台市は離れており実際に目を見た人が現状を伝えることが必要だと感じました。報告会が終了し支援活動も無事に終わることができました（写真27）。

・23日（土）移動日

仙台から鹿児島へ。1週間長いようで短い、とても意義のある活動ができたと思います。

2. 歯科衛生士の目からみた被災地支援

被災地支援を行う時の時期の見極めが重要だと思いました。震災直後から急性期、移行期、慢性期に分けられます。急性期では医療機関が機能していないので齲蝕や歯周病の急性症状に対応し、慢性期では医療機関が再開し始める時期なので口腔ケアが中心となると思います。どの時期の支援なのかを考え、歯科衛生士として何が求められているか考えて支援を行うべきだと思いました。

また、災害が起きた時は地元のコーディネーターの役割がとても大きく、被災地の状況、避難所、不足物資の確認、医療支援者と被災者の掛け橋等たくさんの役割があることを今回学んできました。以下にまとめます。

- ・コーディネーターに求められること
- 1) 避難所の把握
- 2) 地元の歯科医師との連携
- 3) 情報収集（各避難所での必要物品など）
- 4) 歯科医師会、歯科衛生士会との連携、情報交換
- 5) 派遣された医療従事者とのコミュニケーション
- 6) 支援業務のコーディネート、スケジュール調整

3. 課題

支援活動で一番大変だったのは支援が決まってからの情報収集でした。厚労省から送られてきた資料には震災直後の情報が多く、鹿児島大学チームが支援に行く7月の状況とは違うのではと感じました。日常生活の支援物資も月日を追うごとに違ってくるのと同様に歯科医療支援も月日が経つにつれ変化していくのではないかと思いました。上司に相談し、他大学の情報を教えてもらいました。その情報によると震災直後は歯科治療などの救急処置等が多かったが6月に入ると口腔ケアや義歯の調整等に移行しつつあるというものでした。このように情報を得られたことで支援に必要な物品等を準備することができました。

情報収集には副病院長の田中教授、事務の溝口課長代理、五月女先生と下田平士長のご尽力で様々な情報を得ることができました。

いかに被災地の現状、何が求められているか等の情報収集が重要で必要なことだと学びました。今後の課題としてどのようにして情報を得るか、どこから得て、どこと共有するか考えておくべきだと思いました。

今回、歯科界は誤嚥性肺炎予防の目的で歯科医療支援活動を行いました。いち早く被災地に入り活動していくことが求められると思います。震災直後の急性期にはライフラインが切断されており、物資もない状態での口腔ケアを行わなければなりません。そこで歯科衛生士として水がない状況や物資が不足している場合の口腔ケアの方法、誤嚥を防ぐための機能訓練等の知識を得ておくことが必要と感じました。

感染・安全対策の面からはライフラインが切断されている場合には、うがいや手洗い等も十分にできないことも考えられるので被災者が感染しないようにすることも重要ですが支援者が感染源を伝搬しないように水がない状況下での手指消毒を徹底するべきだと思いました。

精神的な面においては、口腔ケアを通して被災者の気持ちに寄り添い、話を傾聴することで少しでも精神面のケア、支援ができるのではないかと感じました。

そのため支援者に傾聴、共感等のコミュニケーションスキルが求められるので、スキルの習得が必要だと感じました。

物資に関しては避難所で義歯の安定剤が不足している時に保湿剤が安定剤の代用として使用されていまいした。保湿剤は口腔乾燥を防ぐ効果もあるので支援物資に必需品だと思いました。支援活動に行く場合、支援物資の選択も重要かつ、求められることだと考えました。

4. 対策

支援活動を通して様々なことを学んできました。このような大規模災害は今後、起こってほしくありませんが起こりうる可能性もあるので起きた時にどう動くかが鍵になると思います。誰でも同じように動けるようにマニュアルの作成を行い、対応していきたいと思います。

今回、鹿児島大学病院の職員として歯科医療支援活動に携われたことに感謝しております。今後も自分のできる支援活動をしていきたいと思います。

最後に東日本大震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、被災地の1日も早い復興を願います。